

Green Grow the Tresses-O

1965

By Stanley Hyland

目次

緑の髪の娘

5

訳者あとがき

262

解説 横井 司

268

主要登場人物

アーサー・サグデン	西ヨークシャー州ラッデン警察	警部
シドニー・トードフ	刑事	
クレイヴン	部長刑事	
ハウ	部長刑事	
ハリス	部長刑事	
ヒュー・ウオーバートン	本部長	
ブリッグズ	警視	
ボナー	警察医	
ライトフット	巡査	
ジーナ・マッツォーニ	イタリア人の工員	
ウォルター・ハースト	寮の管理人	
ハナ・ハースト	ウォルターの妻	
ジョゼフ・ブランスキル	紡織工場経営者	
ユワート・ハーディカー	工場の染色場監督	
リチャード・デンビー	公共図書館館長	
ポール・ニクソン	航空機会社社員	
レンズ	合衆国空軍大尉、警備警察部長	
ジョゼフ・カリノフスキー	航空兵、無線通信士	
フランク・トードフ	シドニーの兄	
マルプラケ	役人	
マーカス・ピアス	情報局員	
クリストファー・パリスター	情報局員	
フォークス	古書販売人	

緑の髪の娘

本書は愛をこめて妻に捧げる。謎を解きほぐすときも、もつれた謎を作るときも、彼女は実に力になってくれた。

Veritas per se placet

honestata per se decent:

Falsa fucis, turpia

phaleris indigent

真実は心を喜ばせる、なぜならそれは真実であるから。

高潔な行為はよいものだ、なぜならそれは高潔であるから。

だが嘘には化粧が

悪行には装飾が必要だ。(十六世紀、エラスムス取
集の『ことわざ集』から)

著者注

西ヨークシャー州エアデル地方にラッデンという場所は実在しない。本書の登場人物もまた架空の人々である。

第一章

「やだ！ 誰か来て、これ、見てよ」

アリス・ローソンの声が紡織工場の節玉修繕場（織物を検査し、ピンセット状の器具で節玉等を取り除く工程）の騒音を切り裂いて響いた。彼女は脂じみた仕事台の傾斜面に身を乗り出し、織りむらや傷はないかと、検査していた布地をしげしげと見ている。洗いざらしの緑色の上っ張りが大きな尻を覆って突っ張り、じっと動かない姿は岩のようだ。

「信じらんない」口をへの字にして言い、それからふと思いついたかのように、「うそ！」と三音高くして言い足した。いきなり一歩下がったので、隣の台のサンドラ・ソーントン（骨盤を仕事台にしたたかぶつけた。サンドラの悲鳴には耳も貸さず、アリスは手にした砲金製のピンセットで、灰色がかった布地に金の針金のように織り込まれた、長い、細い、明るい一本の線をつついた。）」「う・そっ！」一字ずつ区切って、低く繰り返した。

隣の織り場の織機の音が古い漆喰壁のひび割れのあいだから漏れてくる。リズムカルに一定のテンポで響く音は、ホットなジャズのダブル・ベースのようだ。二十ヤード離れた、二階下の中庭からは、コークスの散らばった敷石を踏みしめる足音、指示を出す男の大声が聞こえる。羊毛起重機のデイズル・エンジンが荷の重さに轟音を上げる。

節玉修繕場の中を奇妙な沈黙が支配したが、その静けさを破って、油を塗った木の床板をこすって後ろに引かれる椅子の鈍い音、ばたばたというサンダルの音がして、二十人の女たちがアリスの仕事のまわりに集まってきた。サンドラ・ソーンントンは骨盤の痛みを忘れていた。

「なによ、アリス」彼女は言った。「黄色い木綿糸がちよっと混じったっていうだけじゃ……」

「冗談じゃない！ 木綿糸なんかじゃないわよ！」

「あれが木綿糸だとしたら」エルシー・ウィットフィールドは言った。「肉の切れっ端に縛りつけてある」

「それも、新鮮な肉じゃない……」

ぎこちない笑い声が上がリ、また静まった。若い娘の一人はくすくす笑ってから、お上品に指三本を口に押し当てて声を殺した。

「ミセス・ヘンダソンはどこ？ 見てもらったほうがいいわよ」サンドラ・ソーンントンは布のその部分を指でそっと触ってみたが、そのときドアがバタンとあいて、隣の織り場からカタンカタンと動くシャトルの音が流れ込んできた。ドアは重さ二ポンドの鉄塊を紐に下げたおもりに引つ張られ、また大きな音を立てて閉まった。織機の騒音はふいに薄れ、背後で控えめにリズムを刻んでいるだけになった。

ミセス・ヘンダソンが人をかき分けてアリスの仕事台に近づいてきた。がっちりしたブラジャーで高々と押し上げられた胸は、あたかも海草を分けて進む碎氷船だった。

「なんなの、アリス？」

「あんなの、ですよ」

「取り除けばいいでしょ」ミセス・ヘンダソンは怒鳴るかわりに、ささやき声で言った。

アリス・ローソンの薄い唇は酸っぱいものでも噛みしめるように動き、歯が小さくかちりと鳴った。彼女は両手を上つ張りのポケットに深く突っ込んだ。「いやです。自分でやってください」

二十秒間、誰も動かず、誰もしゃべらなかつた。それから人の群れの後ろのほうで、興奮した甲高い声が上がった。「おしゃべりジニー。きれいに結つた髪も、あれで台無し！」すると、そうだ、そうだ、という低い小声がしばし続いた。

ミセス・ヘンダソンは下唇を噛み、小さくうなずきながら身を乗り出して、張り伸ばした布をじつと見た。色染めしていないサージの中央に、明るい金色の髪の毛が十数本、長い一束になって織り込まれている。その片方の端には、茶色くごわごわした皮膚と肉がこびりついていた。

〔訳者〕

松下祥子（まつした・さちこ）

上智大学外国語学部英語学科卒業。訳書にアガサ・クリステイヤー『パディントン発4時50分』、ジャック・オコネル『私書箱9号』、レジナルド・ヒル『午前零時のフーガ』（以上早川書房）、グラント・アレン『アフリカの百万長者』、サッパ―『恐怖の島』（以上論創社）他多数。

みどり かみ むすめ
緑の髪の娘

——論創海外ミステリ 181

2016年10月25日 初版第1刷印刷

2016年10月30日 初版第1刷発行

著者 スタンリー・ハイランド

訳者 松下祥子

装画 佐久間真人

装丁 宗利淳一

発行所 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル

電話 03-3264-5254 振替口座 00160-1-155266

印刷・製本 中央精版印刷

組版 フレックスアート

ISBN978-4-8460-1574-9

落丁・乱丁本はお取り替えいたします